

發表要旨

石器と人類の出会い ―人類史における石器の位置―

橋 昌 信

人類は自然から離れ、自然に戦い挑むことによつて初めて「ヒト」になつたと言われ、その人類と自然とを分離させながらもつなぐとする役目として各種の道具が存在する。

人類の最初の道具としては木や骨、石など、自然界のものをそのまま使用し、さらに道具の製作という技術を獲得した。道具の製作・使用は、適当な大きさ（長さ・重さ）・形・強さなど、素材や石器に対しての認識は人に反復・選択という体験や知識の学習の機会を与えることになり、ヒトの観念の世界をひろげたとはいえない。また、目的により適した形態や機能を備えた実体を得るための石器の加工は、一定の手順・順序などの技術「ワザ」を育み、さらにその一連の過程で、次の段階で起こりうることを予測する思考や予測に反したことに對する判断力・応用力をも培うことになつたものと思える。

このように、石器の製作と使用は、初歩的かもしれないが人類の論理的思考を発達させ、また、物質を用いて実践する技術を習得させ、さらに伝統を築き伝承することを可能ならしめたのであろう。すなわち、猿人段階以降の石器と人類の出会いには、人類の思考と実践に強く結びつくなど、人類史の発展に大きく貢献しているとみなされる。

石器は石という素材に、なんらかの形で、人間の意志が投影されていると、認識・判断できるもので、人間が所要の

目的をとげるための手段として存在し、目的とそれに到達する過程が含まれている。そこで石器の形態から機能・用途を推定し、さらにその石器が作られ使用された目的や原因・動機などに肉薄することが可能となる。

その基礎となる石の遺物は、それが果たして、先史時代の人々が作り使用した石器かどうかの判断が必要にされる。この判断は基本的には、加工の痕跡が石器の全面的ないし一部に認められるもの、さらに、肉眼・顕微鏡・写真などによって、刃こぼれ・条痕・擦痕・磨痕・打痕などの使用痕が観察されるものが石器として認定される。これら狭義の意味での石器の他に、先史時代の人々との生活に関わったと認識・判断できる石の遺物で、生活遺構との関連が見られるものと石器製作に関連するものがある。

これら石器の機能として、剥片が持つ鋭利さは対象物を切る・切り裂くという機能を有し、また固い重量のある石は砕くという破壊力に勝り、共に対象物を変形させる働きを持っている。このことは、有効な木器・骨器などの道具の製作・使用を可能にした。さらに石器の機能は、初期の人類の生活で、動物の遺体（肉）の処理を容易にさせ、肉食への依存度を高め、食料の分配にも関与し、強いては共同体の構成や社会構造にも影響を及ぼしたものと推測される。

大半の石器は生活のベースとなる食料の獲得や生産に直接結びついている第一次的な道具だけに、それ以前に存在した石器の消滅、あるいは逆に新しい石器の出現などの石器の消長は、生産手段や生活形態の変化を示唆するものとみなされる。さらに石器に認められる石材や形態、あるいは製作技術の変化なども、先と同様に人類の歴史の上でのある種の画期に深く関わっていることを予測させるのである。

このように石器と人類の出会い、そのまま人類の発展に大きくかわかっており、三〇〇万年に及ぶ人類の歴史で、金属器に出会うのは、最も早い地域の西アジアでも約六、〇〇〇年前であり、日本で鉄器・青銅器が用いられるのはせいぜい二、三〇〇年前頃からで、人類史の尺度では極めて最近の出来事である。それだけに石器および石器製作の行為が果たした役割は計り知れない大きなものが存在すると言えよう。